

なかった。また、内体面・見込み双方の文様そのものの意味が薄れたあるいは衰退した結果、特定化された組合せを無視したオリジナル様式が誕生するようになったと考えられる。オリジナル様式については今回ほとんど見つけることが出来なかったが、文様の組み合わせ次第で何通りも存在すると考えられ、さらに広域の資料を収集することによって新たな様式を確認できるであろう。

劃花文碗の文様型式 横田賢次郎・森田勉両氏の型式分類をもとに

小坂 祐子

横田賢次郎・森田勉両氏の劃花文碗の型式分類案（『研究論集』1978・九州歴史資料館）に、福岡県内から出土する劃花文碗の資料を用いて、いくつかの補足・訂正を加えることによって劃花文碗の文様型式を確立すること、そして、その結果をもとに沖縄から出土する劃花文碗のほとんどが小破片であったが、その中でも比較的文様が残されている体部破片・底部破片それぞれ十点ずつ、計二十点の身元を明らかにすることが本論の目的である。

横田・森田両氏の分類案は劃花文碗の内体面文様に着目したものであり 2類（蓮花文）、3類（螺旋文＋櫛描文）、4類（沈線文＋飛雲文）の三つに分類し、それらの特徴を簡単に述べるにとどまっている。しかし、報告書等の資料を収集していくにつれて両氏の分類案では全ての文様型式に対応しきれていないことが明らかになったのである。本論では筆者が確認した型式を 2類～4類に分け分析している。まず、全ての文様型式に言えることであるが、両氏の分類案は劃花文碗の典型的な文様型式を述べているとすることが出来る。それ以外の型式としてまれ、または例外的であろうと考えられるものを 2類で一点、3類で二点、4類で一点を確認した。また、見込み部分に施される文様はその多くが特定の内体面文様と共に施文されるものであると考えられることから、沖縄出土の劃花文碗のように小破片であっても、文様が残されていれば碗全体の文様の推測・復元が可能であると考えている。しかし、今回取り上げた小破片二〇点のうち、どの文様型式に属するかを明らかに出来たのはわずか八点にすぎ